

太子堂のお祀り

- 聖徳太子堂棟札によると、太子堂は文政年中（文政八年一八二五）四興屋大工町に債権修繕したものの、維持困難となり、明治二十六年（一八九三）五月、町内で相談の上、小林松右エ門に任せることとなった。
- 松右エ門は自邸に移築し、二十余年の間、萱屋根を葺き替えて維持してきたが、将来にわたっての維持は難しいと判断し、松右エ門養子慎吉は、大正三年（一九一七）瓦屋根に葺き替えた。（ただし、この時には四つ屋根の上方部だけ瓦で、下部萱が残されたのを、昭和三十年代に松瀬の三男恒夫が全部瓦に変え、現在の形になった。）
- そもそもこの太子堂については、明和八年（一七七二）五月二十二日、小林喜内長度が施主となり、教護寺宥傳を法導師として、聖徳上宮太子新堂の入佛が行われた旨の棟札がある。藩お抱えの棟梁を中心とし、大工衆が費用を出し合って建てたものと思われる。（宮殿が延宝七年（一六七九）頃に製作されたという覚書があるので、これは再建かもしれない。場所は明らかではないが、施主が藩主でないので城内に建てたものではないとわかる。）
- その後は、五月二十二日を定め、代々の教護寺住職を迎えて太子堂祭りが行われるようになった。慎吉の時代には、幟を立て屋敷内に屋台店を入れて、賑やかな祭りの体なしていたという。
- 慎吉没（昭和十四年）後は、連れ合いの清（せい）が慎吉の意を体して祀りを続けた。慎吉の弟子が来て幟を立て、賑わいの中に教護寺住職の読経が流れたもようである。しかし、清も、慎吉の弟子も年老いていくにつれ祭りの風景は変わった。幟を立てるすべもなくなり、重ねて教護寺住職も亡くなったことで、清は二女の佐藤松瀬と、姪の阿部要（よう）・千里（ちさと）の助けを借りながら、大工町の昔の職人衆の未亡人らを集めて、赤飯をふるまい、菩提寺の極楽寺住職の読経によって、何とか祭りの体を保ち続けた。
- 清の没（昭和三十一年）後、松瀬は母の生前と同じように太子堂の祀りを続けることに使命感を持ち、従姉妹の阿部要・千里らと、年々少なくなっていく大工町関係者とともに祭りの集いを続けた。
- 昭和四十五年五月、太子堂祭りの準備を続ける中で、松瀬は病に倒れ、亡くなった。その後、小林家に居住し、家屋敷の管理をしていた松瀬の三男恒夫は、祭りを主催することとはなかったが、五月二十二日には家族にお参りをさせ、一年に一度は大工に太子堂の建物の危険度を点検させ、手入れをしていた。
- 昭和五十二年、恒夫は小林の家屋敷の管理を離れた。

「葺き替えにあたり、指示された大工は太子堂の周囲に山積みになっていた瓦を用いた。そこに荘内藩主酒井家の紋があったということ」を恒夫は後に語った。

太子堂が風間邸に移築された経緯

- 小林慎吉邸は、昭和五十二年恒夫が離れてからは、阿部要とその養子邦司夫婦 阿部千里の娘夫婦が管理した。
- 慎吉の長女は養子徳太郎を迎えて小林家を継いだが茨城県の日立に住まいし、鶴岡とは疎遠であった。没後二男富士也は鶴岡の家屋敷を相続したが、東京住まいの人間で、ここを更地にして売却することを考えていた。
- 平成六年、大工町太子堂が鶴岡市の文化財指定の候補となり、視察調査に来た。視察員の中に鎌田氏がいたものと思われる。（この話は、鳥居町の日向家武家屋敷が指定を受けた年のことであり、太子堂は来年以降にということになったと知らせがあった。）その後風間真一夫妻が小林邸の太子堂を見たもようである。
- 平成九年、鎌田氏は自分の屋敷に置き場があるから太子堂を解体してそこに保存し、然るべき場所を探して再建し、文化財指定をとると言って持って行った。
- 平成十一年八月に、太子堂が風間邸に再建されたことを聞いた阿部邦司氏は、「鎌田氏の話が違う」と思ったが、小林邸も更地となり、自分の役割も終わったようなものだと、太子堂の幟を恒夫の家を持ってきた。
- 平成二十年七月、極楽寺より太子像及び厨子、宮殿が太子堂に移された。